

未来をデザインする教職学協働

好きになる 楽しくなる キャンパス

学生、教員、職員、あらゆる立場の人が知恵を出し合えば、
思いもよらないアイデアが飛び出してくるかもしれません。
目指すのは、「ここに来てよかった」と笑顔になれる大学です。



SPECIAL TALK

KAKEHI YOSHIYUKI
LEE SAEROM
KOTANI MOMOE
KAWAIKE HIROFUMI



香川大学長 寛 善行



創造工学部創造工学科 創発科学研究科助教
(専門分野)感性工学・ハタシマインギ
(主担当コース)造形・メディアデザインコース 李 セロン



医学部看護学科4年生
(高松高校出身) 小谷 茂々笑



企画総務部
総務課長 川池 拓史

悩むより、アクションを起こそう

「愛される」大学づくりには、学生目線が不可欠

寛 まず自己紹介をしましょう。川池さんは現在、本学の総務課長ですが、その前はIT系の企業に勤めておられたとか。

川池 関西のIT企業に3年ほど勤めました。私が卒業した頃は超就職氷河期かつITバブル期で、経済学部卒だったのでITリテラシーは就職してから身につけたものです。関西や東京で、本学でも採用実績がある会計システムへの導入に携わったりしていましたが、いつかは故郷の香川に帰ろうと決めていました。28歳で会社をやめて、地元でどんな仕事をしようか考えた時、そういえば大学のことは学生の時しか知らないし、香川で腰を据えて働けなから香川大がいいなと。

李 私は国立ソウル科学大学在学中に1年間に日本語の勉強に費やし、3年生の時に交換留学生として北海道の室蘭工業大学で1年過ごしました。いったん韓国に戻りましたが、もうちょっと勉強したいなと思って、再び室蘭工業大学で修士から博士研究員まで7年ほどを過ごし、香川大に来るまでは島根の松江工業高等専門学校で教えていました。韓国でも理系女子は珍しく、私の代も工学部約70人の中で女性は6人、博士課程まで終えたのは私だけ

け。よく「変わってるね」と言われます。

小谷 私は医学部看護学科4年生ですが、大学でやりたいことがまだまだあるのに大学生活が足りない！と思って、今年4月からポジットティブ休学中です。

寛 川池さんは転職、セロン先生は日本語の勉強のため、それぞれポジットティブに「人生の寄り道」を判断されていますし、自分の在り方を見極めるチャンスではないでしょうか。目の前の階段を着々と上っていくばかりだと、気が付いたら階段を上ることそのものが目的になってしまいがち。休学という、ある意味で宙ぶらりんな状態はスリリングでもあると思うけど、きつと小谷さんにとって良い糧になると思いますよ。

川池 私が寄り道した1年も、それなりに楽しく過ごしていましたし、何にも縛られない時期が一生のうちにあってもいいんじゃないでしょうか。

挑戦できる場所がここにはある！

寛 今回のテーマは「教職学協働」です。「きょうどう」には「共同」「協同」「協働」の3種類があり、ここで

きるかな...と思っている人の背中を「あなたにもできる」と押して、香川大に来てよかった！という人たちを増やしたい。教職学協働も、私からすると「まさにそれだ！」と思っています。

寛 1年生の時にあなたが医学部看護学科代表としてシンポジウムに出て、「スーパースターになりたい」と発言したことをよく覚えていますよ。自分で殻を破って、ちゃんと成長してきたんですね、大したものだ。セロン先生はソウルの一流大学から本学にいられて、いかがですか。

李 韓国は完全に学歴社会で受験競争が激しく、高校では部活もさせてくれません。大学に入っても日本と違って相対評価なので、熾烈な競争が続きます。そんな大学時代、初めて日本に来た時、授業中にゲームで遊ぶ大学生を見て「ここには個人の意志で選択できる自由な教育があるんだ」とカルチャーショックを受けました。決して悪い意味ではなく、私も自分で選択して生きたいと思ったんです。そこで初めて、教育者を志しました。異文化から自分を見つめ直すきっかけを日本でいただいたことが、今も私の根幹にあります。「みんなが香川大を好きになって、学生も職員も教員もずっと幸せに過ごしてほしい」という壮大な夢

のために、私が人と人の架け橋となれるよう、協働は日々意識していることです。

寛 何を幸せと感じるかは人それぞれだけど、本学で「エンジョイした」「何か掴んだ」と思ってほしいです。日本の大学における教職協働は私立大学の方が早く、1980年代からムーブメントが始まっています。公的教育を司る中央教育審議会が教職協働を唱え始めたのは2014年、その後法制化されましたが、この時点ではまだ「学生」が出てきません。

僕自身は、学長になってから東京の学生との対流促進事業を行うようになり、彼ら自身が課題解決型のフィールドワークを香川で展開していくのを見て、教員だけでなく職員だけでもなれない教育の在り方があると実感しました。それが教職協働の第一歩です。その後、DXラボを通じた教員と学生の連携、学生目線での広報活動などから、さらに「学生と一緒に取り組む」と、生まれてくるものが変わる」と学びました。これは言わば「職学協働」ですね。それを踏まえて、大学にかかわる人、特に学生たちがエンジョイできる大学をこれから目指す上で、教職学の協働は欠かせないと感じています。

そ、学生や教員と一緒に面白いことができる」と感じたことはたくさんあります。それこそ「ちょっとした寄り道」が、普段見ている景色とは違うものを見せてくれるかもしれないですね。

小谷 私が「にもにも」の活動を通じて気づいたのは、何かやりたいと思っている学生は多いのに、実際にアクションを起こしている人が少ないこと。私は看護学科に籍しつついるんなプロジェクトに関わることで、「あれも面白い」「こっちも面白い」と道がいくつも開けましたから、アクションを起こせる場が大事だと実感していますし、本学はそういう場で満ちていると思います。

李 すごく共感できます。私の教室は学生がよく来て人生感について相談を受けることがあります。正直私にもわかりません。私自身もつらい受験生活を送って、どういう道に進むべきか悩んでいました。私が言えるのは自分がやってきたこと、つまりアクションを起こすしかない、チャレンジするしかないということです。ダメだったら戻ればいいんです。香川大は「アクションを起こせる場が存在するから安心してチャレンジできる」「正解じゃなくてもいいからチャレンジできる」と教えられる大学であってほしいと思います。

教職学協働の実績



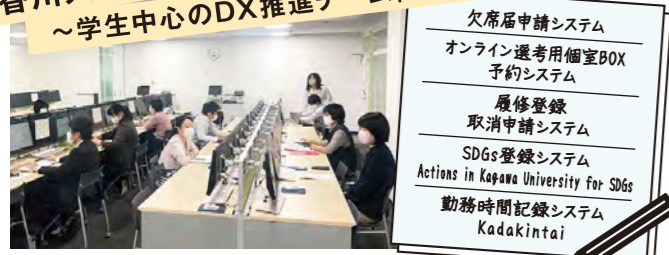
共に創る
学生イベント

幸町キャンパスでは毎年4月に新入生歓迎祭、10月に香川大学祭を開催しています。企画・運営については、H.O.P.(大学祭実行委員会)の学生と各学部等の教員や学生生活支援課職員が協力して行っています。どちらも学生主体のイベントであるため、H.O.P.がメインで企画・運営を行います。教職員は、企画・運営内容の精査、予算面での調整、準備や運営の補助等をし、H.O.P.の活動をサポートしています。コロナ禍の影響で例年通り実施できないことが多いため、その都度双方で話し合いを行い、開催に向けて準備を行っています。

詳しくは下記のQRコードから



香川大学のDXは私たちに任せろ！
～学生中心のDX推進チーム「DXラボ」～



香川大学は、2021年7月にDX推進戦略である「デジタルONE戦略」を策定し、学内全体でDXを推進しています。その一環として、創造工学部及び創発科学研究科で情報技術を学ぶ学生を中心とするDX推進チーム「DXラボ」を組織し、学生・教員・職員が協働してデザイン思考に基づいた、調査やシステム内製開発を行っています。

「DXラボ」では、教職員や学生の目線で業務を俯瞰して調査する「業務UX調査」と、学生がファシリテーターとなり業務を改善するためのアイデアを創出する「業務改善アイデアソン」を通して多角的に業務のありかたを見直し、デザイン思考を実践しています。また、業務部門と協働による「システムの内製開発」や、教職員を対象とした、学生が「DXラボ」や授業等で培ったノウハウを伝える「業務システム開発ハンズオン」を開催し、教職員自らが業務に関するシステム開発を行っています。このような様々な取組を行うことで学内の業務改善やDX推進を行っています。



日本一小さな県から世界を守る
サイバー防犯ボランティア「SETOKU」

「SETOKU(SECurity Team Of Kagawa University)」は、サイバーセキュリティ分野の「安全・安心な地域社会の実現」に向けて結成された、香川大学生のボランティア団体で、香川県警察や他機関と連携して香川大学ならびに地域における①犯罪被害防止のための教育活動、②広報啓発活動、③サイバー空間の浄化活動を中心に取り組んでいます。特に、地域の小学生を対象として学生が講師となり授業を行った犯罪被害防止のための教育活動はメディアでも大きく取り上げられました。SETOKUの活動は学生が中心となり、依頼に応じて企画立案から実施まで行っています。全体的な取り纏めの他、依頼元との交渉については教員が行っており、職員はメディア展開などで事務的にサポートしています。

詳しくは下記のQRコードから



極め付け四国鉄旅
～さぬきの文化探訪～

香川大学とJR四国は、共同研究による連携事業として「地域の魅力の再発見」と「地域に貢献する人材育成」を目的とした「極め付け四国鉄旅」を企画しました。

県内を探訪し、地域の文化や人々とのふれあいを通して魅力を発見する旅です。貸切列車内において、香川大学の教員から地域の歴史や文化を学び、旅先では学んだことを肌で感じる事ができます。現地の案内や弁当のデザインなどは経済学部学生プロジェクトの学生が関わっており、全体の計画や学生のアイデア実現のサポートを教職員が行っています。

詳しくは下記のQRコードから



ガラス作家・杉山利恵さんの作品「Blue Birth」

寛 このイノベーションデザイン研究所(1D研)は、違うフィルターを持つ人たちが風通しよく議論でき、新しいアイデアを抽出することで、いろんなものが生まれるよう願ってつくりました。1階にはガラス作家・杉山利恵さんの作品「Blue Birth」が飾ってあり、「さまざまな人の化学反応が起こってイノベーションが生まれる」1D研の理念を象徴しています。庵治石(花崗岩)とガラスを混ぜることで生まれた美しいブルーが印象的な作品ですが、なぜこういうきれいなブルーになるのか詳細はわかってい

ない、偶然的な産物でもあります。まさしく1D研にふさわしい作品だと思っています。セロン先生も関わっておられる國枝孝之先生のプロジェクト・中野武宮のデジタルアーカイブには、非常に可能性を感じますね。すべての史料をいったんデジタル化して再構築すると、思いもよらない事実がわかって、画一的な解釈になりがちだった今までは全然違うものが生まれるんじゃないかと。単に「古い貴重なものをデジタル化して保存しよう」というだけのプロジェクトではないところに魅力があります。

李 プログラミングという手段・手法で与えられた問題の解を求めるのは得意ですが、問題探しやデザインからものづくりを進めるプロセスは、「デジタルアーカイブを通して勉強している途中です。何が正解かわからないし、正解の基準も自分たちで決めないといけないし、どこまでやれば十分なのかも自分たち次第。ゼロから何かを生み出すのは大変だと日々思っています。」

寛 与えられた問題の回答を書くのが受験だけど、社会では「何が問題か」を見つけて本質を見極められる人を世界中が求めています。本学もそういう人材を育てる挑戦をしています。まさにそのための教職学協働です。1D研と同時期に、文系と工学系の研究科が完全に一体化した創発科学研究科という大学院をつくりました。「創造」とは少し意味が異なり、どっちへ飛び出すかわからないけれどボンと生まれる別のアイデア、それが「創発(emergence)」です。様々な専門領域の先生方が起爆剤になって、多少不協和音があってもその方がエネルギーになるんじゃないかというくらいユニークな大学院です。今その博士後期課程をつくらうとしています。セロン先生が経験してきた博士課程とはかなり雰囲気が変わるでしょうね。

小谷 学生として、私は1〜2年生の時看護学科の問題点をばり探していたって言われて、大切なのは問題を追求して直すことより、問題そのものを広い視野で「デザイン」することではないのかと気づいたんです。特に幸町キャンパスの起業部の影響は大きかったですね。

李 自由で、自ら問題を探す課題が

寛 セロン先生が考えていることが周りにいて、だからこそセロン先

生の研究も前に進むんですね。そういう環境は簡単にできるものではないから、実はちょっと自慢したいんですよ。教育は結局のところ「人」どんなプレイヤーが集まっているかです。